空機製造における日本の役割は意外と大きい。ボーイングやエアバスの機体の胴体部分やリージョナルジェットと呼ばれる小型旅客機の主翼などを生産し、最終組立てを行う海外の航空機メーカーに供給しており、特に最近のボーイング機の胴体部分はほとんどが日本製となっている。私の担当はその資材調達であり、金属板材のバイヤーとして主に欧米のアルミメーカーを相手に日々仕事をしている。

日本を含めアルミメーカーは世界に数多く存在するが、航空機用のアルミとなると欧米の数社による実質上の寡占状態となっている。そのような中で安価で良質な材料を調達するのは容易ではない。価格交渉の際は相手も強気であるし、また中には特許の関係上、特定のメーカーからしか調達できない材料も多い。また価格以上に厄介なのが品質である。基本的な事項は仕様書に規定されているが、すべてを規定するのは不可能であることから、納入された材料の品質をめぐる論争が絶えず発生する。そこで、社内、材料メーカー、そして時にはボーイングなどの顧客を巻き込んでの仕様調整を実施するのであるが、海外の二社が相手であり、しかも技術的な事項も多いため困難な調整となる。

しかし、このような時こそUWCでの経験が自分を支えてくれていることを痛感する。粘り強く交渉する姿勢、相手の意見を尊重しながらも自らの主張も行うこと、そして航空機製造プロジェクトという共通の目標がある以上、顧客、納入メーカーといった立場を超え合意することができるという信念。結局はこれらのことが調整を行うにあたり最も重要となってくるのである。

一昨年の米国同時多発テロ以来航空機の需要は落ち込んでいるものの、新規開発プロジェクトも数多く存在し、長期的には回復が見込まれている。そして、それを織り込んだ材料メーカーとの駆引きはすでに始まっており、今後も厳しい状況が続くものと予想されるが、UWCでの経験を活かして頑張っていきたい。

左：課外活動でグランドキャニオンへ
右：カレッジの卒業式にて　　（ともに右端が筆者）

中央公論　2月号　発売中！　定価800円（税込）
〒104-8320 東京・京橋2-8-7　☎03-3563-1431　中央公論新社
特集「戦争責任」の決着をどうつけるか
徹底討論・「戦争責任」の着地点を求めて　船橋洋一×御厨貴×三島憲一
日本国民が果たさねばならぬ責任とは　橋爪大三郎
[特集]円安が日本を救う
金融緩和はデフレ克服に直接効く　浜田宏一
少子化は女性の責任ですか―「産まない」選択「産めない」現実
国の主導で「育児の社会化」を

航空機プロジェクトに生きるUWC体験

川崎重工業航空宇宙カンパニー
川端洋平（かわばた ようへい）

UWCアメリカン・ウェスト・カレッジ（アメリカ、一九九〇～九二年）。九七年慶應義塾大学法学部政治学科卒業。その後川崎重工業入社、現在に至る。

●㈳ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三六〇名以上の卒業生を輩出している。

当時UWC奨学生の試験に合格するとは夢にも思っておらず、合格通知を受け取ったときもあまり実感が湧かなかった。しかし、この一通の手紙が当時ごく普通の高校生であった私の人生をその後大きく変えることとなった。

波瀾の幕開け

UWCでの生活は波瀾の幕開けであった。カレッジに向かった最初の日、なんと乗継ぎの飛行機に乗り遅れてしまう。英語もろくに話せなかったので、カレッジに連絡するための英語の原稿を作成し、それを電話口で必死に読み上げ、カレッジにやっとの思いでたどり着いた。また到着すると、翌日いきなり山の中に連れて行かれたが、どこへ行くのかもよく分からないし、周りの人とのコミュニケーションもままならず、とにかく不安で仕方なかった。さらに授業が始まると今度は課題に追いまわされた。課題は「なぜ第一次世界大戦が起きたのか述べよ」といったもので、それまで年号と出来事を覚えるのに一生懸命だった私にとっては最初はどうしたらよいのかよく分からず、週末図書館にこもりきりとなり何とか書き上げるという日々が続いた。

UWCを楽しむもう一人の自分

このように当初は今までとは全く異なる生活に戸惑うことばかりであったが、時が経つにつれ、その状況を楽しんでいるもう一人の自分自身がいることに気がつくようになった。その後も、最初の休みに行ったメキシコでは入国管理局に拘束されたりしたが、さらにいろいろな経験を積み重ねる中で精神的にタフになっていった。

また、二年間の生活の中では異なる国の人と共同して作業を行う機会に多く恵まれた。カレッジの中では、一週間かけてカヌーでの川下りをしたり、アジア出身の人が集まってアジアの文化を一日かけて紹介する企画を実行した。またカレッジの外でも、地元の教会の修復工事を行ったり、山岳救助活動などに参加したりした。これらの活動を行う中では意見の食い違いなどもあって大変な場面もあったが、それを乗り越え、一つの目標を達成し、より大きな感動を皆と共有していく中で、自己主張をすると同時に相手の立場を尊重することの大切さを認識した。そして「国が違う、文化が異なるからといって共同して何かを実行することが不可能だということは本質的にあり得ない」と自然と実感できるようになったと思う。

航空機用資材のバイヤーとして

卒業後は日本の大学に進み、その後航空機メーカーに就職した。日本の航空機メーカー？と思われるかもしれないが、実は航